

現代用字用語 の誤典

松下史生 著

松下史生

1916年生まれ。

台南師範・法政大学文学部卒業。

台南師範訓導・慶応義塾外語講師・慶応義塾大学講師・裁判所書記官研修所教官を歴任。

〔著書〕「現代表記法概論」(非売品)「同音語用字例解集」(法曹会)「現代語表記の基礎知識」(ぎょうせい)「仮名づかいと以た漢字の誤典」「漢字と難語の誤典」(以上、自由国民社)。

〔論文〕「法廷に現われた語い」「法令用語の送りがない批判」「判決主文の言い方」「聞き誤りの言語学」「意味機能として正負の概念」「固有の名を奪ってはならない」「常用漢字表(案)診断する」など。

現代用字用語の誤典

1982年9月10日 第1刷発行◎

定価 980円

1982年10月22日 第2刷発行

著 者 まつ した ふみ 生
松 下 史 生
発 行 者 長 谷 川 秀 記

〒104 東京都中央区京橋2-4-12

発 行 所 株式会社 自由国民社

電 話 03-281-1271

振 替 東京 0-189009

印刷・製本 新興印刷

落丁本・乱丁本はおとり替えいたします。

現代用字用語 の誤典

松下史生 著

- 現代仮名遣いの違い
- 現代送り仮名の違い
- 同訓語の書き分け方の違い
- 熟字訓語の読み方の違い
- 同音語の書き分け方の違い
- 難読語の読み方の違い
- 地名の読み方の違い

自由国社

まえがき

●はんぺん・かまぼこの「紀文」が、ビデオによる社内報編集という新しい試みを始めたそうである。社内報といえど読ませるもの、と決めてかかっていた感覚からは、見る紀文は確かに目の覚めるような発想の転換に違いない。未来を開く若者―映像人間への期待をこめて、紀文の社員教育、商品PRが新しい道をたどって成長することを祈りたい。

●若い人々の言語能力の貧困衰退を憂える嘆きは、今に限らず連綿としてあった。また、活字はなれの世代でなくとも、読むものが軽量化し、書く能力に退潮が見えていることは、出版物の動向や個々の文書生活の実態を吟味すれば、十分理解できるところであろう。総じていえば、活字はなれ現象は、日本国民全体を覆う問題でもある。根っからの活字はなれか、中途からのそれかという違いではなからうか。

●活字はなれ・テレビ原因説は、極めて分かりやすい。しかし、事はそれだけで説明し尽くされるとは思われない。戦後、客観的な能力判定法として急速に広まったマルチヨイ式も、大いに一役買っていると見なければなるまい。なるほど、用意された多くの答えの中から、ただ一つの正解を選ぶこの方式は、数字をも含めた諸種の記号で解答するのであるから、およそ映像とは縁遠い。が、思考の結果を文字による言語表現にまとめない点で、記号は図柄に等しい役目にしかない。用意された記号は、質的には映像同然なのである。国公立大学共通

一次のマークシート方式は、一層図柄性―映像性が明らかである。

●最近、アイドル歌手の持ち歌「薔薇」という漢字を書ける若者がふえたという。また、幼稚園児が「鳩・猿・爺・婆」などの漢字を読んだとて、「漢字は難しくない」との議論にうなずく向きも多い。漢字を含めて、文字の学習や能力で大事なものは、いったん習得したものがきちんと維持され、必要に応じて直ちに再生・再現されることである。残念なことに、一度覚えたと「薔薇」は、必ず忘れられるときがくる。しばらく使わないと、漢字は忘れ果てるのが多くの人の悩みである。なるべくいつまでも忘れないために、また誤りを犯さないために、読み書き八つの方面から多くの事例を採集し、備忘ならぬ「備誤」たらんとするのが本書のねらいであり、また願いでもある。誤りをあえて匿名にしなかったのは、作り物でないという明かしのためである。ご了承頂きたい。

●本書の成るについては、自由国民社及び同社編集顧問田辺典夫氏の格別のお骨折りをこうむった。記して厚く感謝したい。

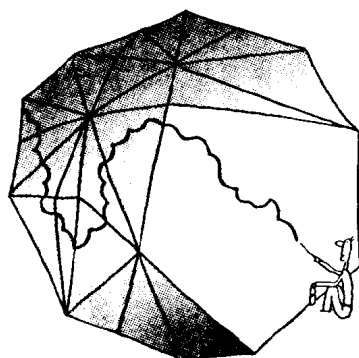
一九八二年七月一日

松下史生

総目次

現代仮名遣いの間違い	七
現代送り仮名の間違い	九
同訓語の書き分け方の間違い	一五
熟字訓語の読み方の間違い	一七
同音語の書き分け方の間違い	二七
難読語の読み方の間違い	二九
地名の読み方の間違い	三三

仮名遣いの違い



第二次大戦が終わった翌年の暮れ近く、政府は、「現代かなづかい」というものを定めて国民に示した。

これまでの、てふてふ・おちいさん・さうでせうをやめて、ちようちよう・おじいさん・そうだろうと改めたので、世間では発音式かなづかいだと受け取った。

しかし実際は、「私は京都へ映画を見に行く」のように、それまでと同じ書き方も残さ

れたし、また、はなぢ・つづくのようなかなづかいも元のままとされたのである。

一方、新しい約束も加わった。それは、おおさか（大阪）、おうさか（逢坂）のような書き分けである。

この編では、それらのうち、特に問題を含んでいて誤りがちな語を取り上げ、古くからの用例も示しながら正しい書き方を説いた。言葉の配列は、五十音順に従った。

ああ
あゝ どちらが正しいか

仮名一文字を繰り返す際、ゝを使う書き方があった。与謝野晶子の『君死にたまふことなかれ』の冒頭には、「あゝをとるとよ、君を泣く、君死にたまふことなかれ」とある。ゝは、「二つ点」といい、広く置字、踊り字などと呼ばれた同字反復符号の一種である。石塔の赤い信女をそゝのかし（俳風柳多留拾遺）

拾はるゝ親は闇から手を合はせ（同左）

抱いた子にたゝかせて見る惚れた人（俳風柳多留）

声はあれどみえぬや森のはゝきゝす（荒木田守武）

仮名文字の繰り返しに使われるのが建て前であったが、姉さんと言ゝやと芸者子を育て（俳風柳多留）

のように、音が同じならというわけで、漢字の反復に用いられた珍しい例もある。

新しい仮名表記では、「浪人に豆軍ありてケーキ無しあゝ佗びしきかなこのクリスマス」（阿部博光『朝日歌選』）

へここえそうな鷗（かみめ）見つめ／泣いていました／

あゝ、津軽海峡冬景色（津軽海峡冬景色）も同じくあゝである。

TBSの「あゝ、にっぽん活動大写真」は、戦前を扱った作品だから古い書き方なのか。厳密な引用・登録商標などの場合は「学問のすゝめ」（福沢諭吉）、「いすゞ」のように書く。

あいづ (会津)

どう違うか

あいず (合図)

にぎやかなお囃子、朝寝朝酒朝湯の大好きな小原庄助さんで知られた『会津磐梯山』は、あいづ、十一年余にわたってナリタの開港をばばんできた闘争拠点三里塚は、さんりづかが正しい仮名遣い。

これは、「津」は「つ」、「塚」は「つか」の連濁(○ページ上段参照)意識を考慮した結果で、駅名や地図に記入する地名の取り扱い上、運輸省・建設省地理調査部・文部省の三者が合意して決めたもの。

唐津(佐賀)、大津(山口)は清音だが、粟津(石川)、木津(京都)、木更津(千葉)、国府津(神奈川県)、神津島(東京)、志津川町(宮城)、沼

津・焼津(静岡)、柳津(福島・岐阜)は濁音で、仮名遣いはづ。

同様に、大塚(東京)は清音だが、濁濁って発音される飯塚(福岡)、貝塚(大阪)、宝塚(兵庫)はいずれもづかと書く。宝塚ファンを略し、ある種の語感をこめた書き方は、ツカファン。もちろんファンの殺到する対象はツカガールとなる。

その他これに類する地名等では、安土(愛知)、舞鶴(京都)、神通川(富山)、和束(京都)、千束島(熊本)が連濁扱い。

ただし、淡路(兵庫)、姫路(兵庫)、太地(和歌山)、多治見(岐阜)、六道(島根)や、伊豆(静岡)、出雲(島根)、上野(群馬)は、二語連合による濁音意識が明らかとはいえないので、じ・ずと書く。

いいなづけ
いいなづけ
いいなづけ
どちらが正しいか

漢字で許嫁、許婚と書く。親同士の合意で、幼い子供の婚約をすること。また、その当人同士。当世風に言えばフィアンセ。

『大言海』は、結納附の約転、つけは買附、手附金のつけなりと説くが、従い難い。

この語は言い名付くという動詞に始まる。

例えば、「既に人の言ひ名付けて事定まりたる中をさけて、人の心を破るらん」(『太平記』)とか、「吾儕(われの輩)には苟にもいいひなづけたる良人はなし」(『南総里見八犬伝』)のように。現代かなづかいで、づを用いる場合の一つに、連濁がある。連濁とは、二つの語が結び付いたとき、後ろの語の最初の音が清音から

濁音に変わることをいう。例えば、「利根」と「川」が一語になってトネカワとなり、「みかん」と「畑」が複合してミカンバタケになるような現象がそれである。

許嫁は、いい名十付けという組み立てだから、仮名遣いはいいなづけ。しかし、現代語では二語の複合意識はかき消されている。あたかも、盃が酒十坏、躰が爪十突くであつたのが忘れられて、さかずき、つまずくとなったように。従って、いいなづけが正しい。

近松の世話浄瑠璃『生玉心中』には、「小さいときからいいひ名づけ」と名詞の形がみえる。そういえば、若いころ「小さいときからイイナズケ／二人で真似たままごとの／庭の桜の咲くにさえ」と歌ったのが懐かしまれる。

いう（言う）
ゆう（結う）

どう違うか

漢字で言う・結うと書くこの二語の発音はどちらも「ユ」。なぜ仮名で「いう」「ゆう」の二通りに書き分けるのだろうか。

髪を結う方は、意味に応じてユワナイ・ユイマス・ユウトキ・ユエバ・ユオウと語形が変化しても、語の幹は相変わらずユのまま。

一方、ものを言う方は、言いきりや名詞に続くときには、はつきりユウ、ユウことを聞けようになるが、その他の場合はイワナイ・イイマス・イエバ・イオウのように、語の幹はイである。

語幹の相違イ・ユは大事だから仮名遣いに残したのである。

いずこ
いづこ

どちらが正しいか

佐藤春夫の『カリグラム』（図形風刺文）に、
尋ね人新聞広告文案（雪子と尋ねる）

こぞ 雪 いま
いづこ （春）

という機知のあふれた作品がある。

福島中佐のシベリア騎馬横断をたたえた落合直文の『騎馬旅行』には「淋しき里に入れば此処は何処と尋ねしに」とあり、漢字では何処と書いた。今は仮名でいづこ。

どこは、いづこが転じた語で口語的なのに対し、いづこは文語的で詩歌専用といつてよい。渡る雁がね乱れて啼いて明日はいづこのねぐらやら……（『名月赤城山』）

いづれ
いづれ
いづれ
どちらが正しいか

「イズレ雨もあがるだろう」「イズレまたお伺いします」のイズレは、いづれが正しい。づを用いるのが「つづく・つづる」のような連呼の濁音（二三ページ参照）か、「かたづく」のような連濁の場合に限られることは、それぞれの項の外、該当の箇所で説いた。イズレはそのどちらにも相当しない。

島崎藤村の『椰子の実』に、「思ひやる八重の汐々いづれの日にか国に帰らん」とあるのも、今ならいづれと書くところ。

その昔源三位頼政が、鶴退治のほうびとしてかねて心にかけていた菖蒲前を鳥羽上皇から賜るにあたり、後宮三千人の侍女からえり

すぐられた十二人の金翠、桃顔の女房を前にて心迷い、目移りしてどれが菖蒲と決めかねた秘説んだという歌がある。「五月雨ニ沢辺ノ真露水越テ何菖蒲ト引キソ煩フ」

後世、優劣のつけ難い美しさをたとえるのに「いづれが菖蒲、杜若」と用いるのは、『大平記』に伝えられるこの故事によったのである。これも現代風に書けば、いづれとなる。

現代文の『日本国憲法』に、「われらは、いづれの国家とも、自国のことのみに専念して」とあるのは、現代かなづかいの制定が憲法の公布に遅れること二十三日であつたから。

どこというときの何処も、いづれと書くことは、前ページ「いづこ・いづこ」で説いたので参照してほしい。

いちぢく
いちぢく

どちらが正しいか

「無花果」をいちぢくと書くのは誤り。ぢを用いる場合の一つに連呼の濁音がある。

「ちち」のような同音の重なりが次第に濁りを帯びたちぢみ(縮み)がその例。いちぢくと書く人には、イチヂクが次第に濁音化したという意識があるのだろうが、それは間違い。

この語は、ペルシア語 anjir に由来し、中国語で「映日果(インジクオ)」と訳したのがわが国でイチヂクとなまったもの。『和漢三才図会』に、「イチヂクは映日果(インジクオ)筆者述を略し、かつ音が変化したもの」とあり、南方熊楠の『続南方随筆』には、「イチヂク(映日果)の漢名の近世音インジクオを

インジチクというように……」とあり、この説のイチヂクの方が原音から考えて正しい。

『大言海』に、「一熟ノ義」として、一日に一粒ずつ熟すからとあるのは、目の病気なのでトラホームをトラホームというのと同じく語源俗解の好例。また、漢字の「無花果」は、花が咲かないのに実になるからとあるのも誤りで、いちぢくは見事に開花する。

北原白秋の詩『泣きにしは』には、「青みゆく蠟の火と月光と、饅(こ)えてゆく無花果」とルビが振ってある。また、西島麦南に、「無花果の目にとふ蠅や水見舞」の句があり、作家・野呂邦暢には、「イチヂク」と題する随筆がある。

類音語「著しい」も、いちじるしいが正しい。

いやだわ
いやだは
どちらが正しいか

「わたし、そんなのイヤダワ」というときは、いやだわとし、いやだはとは書かない。

文の終わりにつき、軽い気持ちで自分の考えや立場を言い張るときに用いられ、因るわ、だめだわ等用例は多く、女性専用の観がある。

また、ある種の感動をこめて、ちっとも知らなかったわ、まあ、すばらしいわ、とても眠られそうにないわなども用いられる。

へ岬まわるの小さな船が 生まれた島が遠くになるわ 入江の向うで見送る人たちに別れ告げたら涙が出たわ」(瀬戸の花嫁)は後者の例である。

「今日よりは顧みなくて大君の醜しづの御楯かたてと

出て立つわれは」(大伴家持)の場合は、「大君の強い御楯としてわれは出立するのである」を倒置したにすぎないから、本来の助詞として用いられているのであり、わとは書かない。

「さるさがなきえびす心を見てはいかがはせむは」(伊勢物語)——このような見苦しい田舎びた心を男が見たら私はどうしようぞーのはも同じ例といえよう。

わは、もともと助詞「は」の変化したもので、詠嘆・感動を表す場合に終助詞として用いられる。だから、「出たわ、出たわ、小判がどっさり出た」「降ったわ、降ったわ、水浸しだ」「赤ちゃん泣くわ道路は混むわ」日教組大会で右翼騒ぐ」(毎日新聞)のように男でも使う例がある。

うなづく
うなづく
どちらが正しいか

この語は、項十突くという組み立て法によつてできた語である。うなはうなじで、えり首のこと。「万葉集」に「うなつきの童が身には」という長歌があり、こどもの髪がうなじを突く程の長さなのをいう。

承知、了解の意を表すのに首を前に動かすことを項突くという、とするのは不十分で、前に動かした首を起こしたとき、髪がえり首を突く状態だったからではないか。

しかしこの語も、以上のような来歴は忘れられ、連濁語としてではなく一語意識が定着しているから、うなづくと書く。頷くという書き換え漢字がそれをあかしだてている。

おう
おお
おお
おー
おゝ
どれが正しいか

「オー」の取り扱いは、おの長音とみるか、おの重なりとみるかで異なる。

国語辞書の多くが見出しにおおを立てるのは、感動詞として「(本方) あちめ、おおお(末方) おけ」(神楽歌)のように、母音おの重なり、つまり連母音と意識されてきたからであろう。「おお、牧場は緑」の歌も、おおである。あ・い・う・えを延ばしたときの仮名遣いは、

ああ いい うう ええ